

## 研究会報告

### 第 49 回

### 東京医科大学免疫・アレルギー研究会

日 時：平成 5 年 6 月 22 日（火）

午後 5：00～7：30

会 場：東京医科大学病院臨床講堂

（本館 6 階）

世 話 人：皮膚科学教室 徳田安章

特別講演：免疫不全症候群における感染と  
その制御

北海道大学医学部小児科

松 本 脩 三

#### 1. B細胞抗原受容体複合体の解析

抗原受容体と BLK の会合について

（血清学教室） 篠本 雅人，豊田 博子，佐山 尚子  
矢那瀬紀子，天野 栄子，水口純一郎

（小児科学教室）星加 明徳

WEHI-231 は、マウスの未成熟 B リンホーマ細胞で、細胞表面に膜型 IgM をもっている。抗原で架橋すると、チロシンリン酸化、イノシトールリン脂質代謝の昂進、細胞内カルシウムイオン上昇、apoptosis を起こし、growth arrest に至る。WEHI-231 にて B 細胞抗原受容体を介する apoptosis を解析し、B 細胞抗原受容体とサークファミリーのチロシンキナーゼ BLK の機能的な会合について検討した。作製された抗 BLK 抗体は Western-blotting により 56KDa の蛋白質を認識していることが示された。再免疫沈降にても抗 BLK 抗体が主に 56KDa 蛋白質を認識しており、この反応はチロシンリン酸化反応であると考えられた。抗-IgM 抗体刺激により、BLK と複数の蛋白質と複合体形成は増強され、BLK と IgM 分子の機能的な複合体を示唆した。

#### 2. 腎移植における末梢血リンパ球のグルココルチコイド耐性

（東京薬大臨床薬理） 平野俊彦、岡 希太郎  
（八王子医療センター臓器移植部） 櫻井悦夫

松野直徒、玉置 透、小崎正巳

目 的：慢性腎不全（CRF）患者リンパ球のプレドニゾロン（PSL）感受性を調べ、腎移植後の急性拒絶反応発症との関係を検討した。

方 法：健康者 98 例と CRF 患者 122 例の末梢血リンパ球の PSL 感受性を、マイトジェン試験法により測定した。リンパ球の *in vitro* 増殖を 50% 抑制する PSL 濃度（IC<sub>50</sub>）を、各被験者毎に求めた。

結 果：健康者リンパ球に比べ、CRF 患者リンパ球は PSL 感受性が有意に低かった（ $p < 0.01$ ）。PSL 耐性の CRF 患者は感受性の高い患者に比べて、腎移植後 PSL 療法を行った場合、急性拒絶反応発症率が有意に高かった（ $p < 0.035$ ）。

結 論：腎移植を希望する CRF 患者の内、リンパ球が PSL に耐性を示す患者に対しては、PSL 以外の薬剤（メチル PSL 等）の選択を考慮する必要があると思われた。

#### 3. 自己抗原 I R B P の免疫学的寛容成立への関与

眼科 竹 内 大、毛 塚 剛 史、  
坂 井 潤 一、白 井 正 彦

網膜には免疫によりぶどう膜網膜炎を惹起する自己抗原 I R B P が存在するにもかかわらず、ぶどう膜網膜炎を自然発症することはない。それは免疫学的寛容が成立しているからである。今回我々は、臓器局在性の自己抗原 I R B P に対する寛容が自己の MHC 分子と同様のメカニズムにより成立しているかどうかについて検討を行った。ヌードマウスの眼球および松果体を摘出し、内在性 I R B P 除去後、同系マウスの胎仔胸腺を移植し、I R B P の非存在下で免疫能を獲得させた。末梢に誘導された成熟 T 細胞のサブセットは、正常マウスのそれと変わらないにも関わらず、I R B P に対して強いリンパ球増殖反応を示した。そして、このマウスより I R B P 特異的 T 細胞株を樹立し、無処置のヌードマウスに移入したところぶどう膜網膜炎の発症が認められた。これらのことより、自己抗原 I R B P のそれに対する免疫学的寛容成立への関与が認められた。